

mcAccessで、きょうも元気

User reports

ユーザ・レポート

ユーザ
ディーラ 新潟小型船舶無線協会
株式会社新潟電波

所在地

mcAccess導入

加入局数

ご利用周波数帯／方式

ご利用制御局

●新潟県新潟市

●平成11年10月

●アナログ34局

●850～860MHz／アナログ方式

●新潟、新発田、新潟第二

見通し距離なら 100kmオーバーもOK 洋上のmcAccess

新潟西港を拠点とする「魁明丸」。釣り船としては県内最大級



mcAccessで連絡をとる船長の野崎明さん

新潟西港及び東港を拠点とする「新潟小型船舶無線協会」では、mcAccessを利用して、船の安全航行に重要な海上気象情報を再生受信、僚船とも通信を行っている。陸から100kmも離れた海上でもmcAccessが活躍し、釣り客の安全の確保に万全を期している。

深夜2時の出航

新潟西港の岸壁に県内最大級の大型釣舟「魁明丸」が接岸する。時間はまだ深夜の2時だ。これから向かう新潟佐渡沖100kmのポイントを目指して、約3時間にもおよぶ船旅が始まる。船のエンジン音を聞きながら広々としたキャビンで仮眠を取る。目覚めたときにはもう太陽が昇って四方の海を照らし出していた。

天気が良く波もない絶好の釣り日和、船長の野崎明さんの合図でいっせいに投竿。水深120メートル前後におとした仕掛に、すぐ強いアタリがくる。そこであげずにじっと我慢。しばらくして野崎船長からまた合図が出され、一斉にリールを巻き上げると、30センチから35センチの大型メバルが次々と海面に姿をあらわす。にわかに活気付く船端を見ながらも野崎船長は魚群探知機や気象情報に注意を怠らない。船の安全管理が船長の一番の仕事だからだ。

安全な航海を実現するために

「魁明丸」船長の野崎さんは雑音や混信によって聞き取りにくい海上気象予報に頭を悩ませていた。AMラジオによる放送はわずか1時間に1回、それも1分40秒にすぎない。そのわずかな時間を聞き逃すと、その次の放送まで1時間待たなければならず、その放送も聞き取れるとは限らない。もちろん事前に綿密なチェックを行って気象情報を収集するが、変わりやすい海の上の天気かともすると安全な航海に支障をきたしかねない。

日本海東部、新潟佐渡沖の天候の判断に重要なのは石川県舩倉島の情報だ。西から東へと天候が変わっていく日本海では、舩倉島の天気が6時間をおいて新潟佐渡沖の漁場に移動してくる。そのもっとも大切な情報を確実に伝えるための手段はないか。そう考えた野



水深120mの海底から
強いアタリがくる

魁明丸に設置されている
2台のmcAccess端末（中央）



僚船との通信や気象情報の受信は小マメに行う

崎さんは、かねてより交流のあった株式会社新潟電波 立川保夫社長に相談をもちかけた。

これを聞いた立川社長は、気象情報の連絡にmcAccessを使用できないかと考え、(財)信越移動無線センターに野崎さんの要望を伝えると共に、方策について相談した。海上にいる船に気象情報を送信する今までに前例のない利用方法だったが、(財)信越移動無線センターは関係機関との折衝を粘り強く続けた。その結果、佐渡海域の航海や人命の安全をサポートできる無線の一つであるとして、このシステムの利用が認められた。

海上気象情報を送信する mcAccess

野崎さんは同僚の第3大栄丸船長吉田栄司さんをはじめ、ほかの船長とも協力して新潟西港及び東港の遊漁船の組織を結成、「新潟小型船舶無線協会」として、事務局を(株)新潟電波に置いた。現在、新潟小型船舶無線協会には34局のmcAccess移動局が加入、海上気象情報を利用している。協会では、1時間に1回のAMラジオ放送を受信録音、再編集し、必要があれば新しい情報を追加して、5分に1回のペースで基地局から自動で繰り返し再送信するシステムをつくった。このため、1回の送信を聞き逃しても5分待ちは受信できるようになった。

「mcAccessを使っているからこそできるシステムです」と立川社長。「魁明丸など大型の遊漁船が向かうポイントは佐渡沖の100kmにもなります。そこまでいくとAMラジオの放送も携帯電話を利用した天気予報も、陸から離れすぎているために受信できません。

一方mcAccessならば標高638mの弥彦山山頂から電波を出しているため、遠距離でも受信することができ、なおかつ高い音質で混信もないのです」

実際、船上での受信については何の問題もなく、情報も明瞭に聞き取ることができた。「ここは弥彦山山頂の制御局からは130kmも離れていますよ」と話す野崎船長。「こんなに離れていても受信できるmcAccessを使っているからこそ、安心してお客さんを乗せることができます」

海に広がるmcAccess

平成11年7月の規制緩和によって広く海上でも使用が認められるようになり、それまでとは違った利用への可能性がひらかれたmcAccess。東京湾などでは観光汽船のスムーズな運行を支える通信システムとして、ま



穏やかな日本海でメバルが次々とあがる

た沿岸の海上運輸や湾岸工事など各種港湾業務に欠かせない連絡手段として、その利用は海の上に広がりつつある。

その流れの中で今後どのように海上利用を展開していくのか、(財)信越移動無線センター 笹川信義専務理事は次のように語る。

「130km離れていても届くmcAccessですから、当センターのサービス範囲の中での、佐渡海峡のほぼすべてをカバーできるようになります。今後は新潟西港や東港の小型遊漁船舶の利用だけではなく、ほかの港の遊漁船や個人所有のプレジャーボート、小型の漁船、工事用作業船など、より広い範囲のユーザーを獲得できると思っています。操作が簡単なmcAccessの良さをもっとアピールしていきたいですね」

魁明丸の上では大魚が続いていた。一度に8匹のメバルを釣り上げる強者もいる。どれも30センチオーバーの大物だ。釣り客の歓声とともに野崎船長も充実した表情を見せる。魚を求めて漁場を移動しながら、両舷の釣り客の竿先に注意する。その間もmcAccessを使って定期的に気象情報をチェックし、付近の僚船と情報の交換をする野崎船長。mcAccessの端末から聞こえてくる声弾んでいる。水平線にかすかに姿が見える第3大栄丸も大漁のようだ。午後3時過ぎに陸に上がったころには、乗り合わせた釣り人のクーラーは、釣り上げた魚でどれも満杯状態だった。

楽しく興奮できる釣り人の船旅を、今日もmcAccessが支えている。